

『高橋景作日記』にみられる幕末の医療活動

関 巴

Medical Services in the End of Edo Period described in
“The Diary of Takahashi Keisaku”

SEKI, Tomoe

キーワード： 蘭方医学 日記 江戸の疫病 医療活動 顕彰碑

1. はじめに

2007年、八洲学園大学紀要論文において、高橋景作⁽¹⁾をはじめとする、上州吾妻の蘭方医たちに関する学問や教育の方法について考察してきた。小稿では、その高橋景作の日々の記録である『高橋景作日記』⁽²⁾の語るものが何であるかその分析を試みたい。(以下『高橋景作日記』は『日記』と略す)。

高橋景作の生地、群馬県吾妻郡中之条町は、郷土史家である金井幸佐久という研究者に恵まれた。とともに、景作の末裔、現当主の高橋忠夫氏が、大切に日記以外の蘭学関係の文書をも保管していたことにより、時を経ても当時をしのぶすがとなったことは、実に幸運であった。世に「蛮社の獄」といわれた事件でとらわれ、その後脱獄、自刃した蘭方医学の師、高野長英を守りとおした吾妻の医師たちが、そのことについて黙して語らなかつたことは、景作の日記にその間の空白をみることから容易に知ることができる。しかし1838年(天保9年)、その空白を除く、景作39歳から始まった36年を超える日記が、金井により翻刻されたことで、吾妻の医師たちとともに高橋景作は、その姿を明るい陽光の中に現すことになったのである。それは同時に幕末の日本の情勢を明らかにすることでもあった。

当時あくまでも伝統を固守しようとする漢方医家たちと、蘭学を通して知り得た科学的精神を医学の基盤とするためには、観念論的伝統医学を廃さなければならないと痛感した西洋医家たちとの対決(『日本の医学』)⁽³⁾が、景作の医家としての命運を変えることになったという事実を、日記空白期からもうかがい知ることができる。そして医の学問を歴史的にみると、1839年(天保10年)から1854年(安政1年)までの間は、蘭学圧迫の時代であった。その間の長英の動きと、景作の日記空白とはどのようにかかわってくるのだろうか。江戸末期の農村の医師が日々どのように生きていたのか、そのようなことに目を向けながら、改めて『日記』を読んでみることにしたい。

幕末の一蘭方医の記録である『日記』を読み解くことによって、西洋医学の知識が日本の農村地帯にどのように広まっていったか、その方法についての事例をも知ることができる。さらにこの『日記』には、当時の政治、経済、農業、庶民の生活、投薬や種痘など医師としての診療の様子、自己の蘭学研究、和漢の古典研究などが記されていて、現代の私たちに重く訴えるものがある。当時を知るためにもこの『日記』のもつ意味は大きい。多岐にわたる景作の記録から、小稿では特に医療活動を中心に、当時の世相などその一部を明らかにし、あわせて、ハーバード大学の研究者エレン・ガードナー(1971～)の論文を紹介したい。

2. 農民としての景作

景作の『日記』をみると、当時の地域社会における彼の役割といえば、農民であり、医師であり、村役人（村長）であり、さらには俳人、歌人として複数の仕事をこなす立場にあったことがうかがえる。景作の家は、持石高としては11石という決して多い方ではなく、村でも特別に裕福ということでもなかったが（『日記』P.602）、記録から見ると、10石以上の土地を有する地主は数人しかいなかったことから、そのうちの一人である景作は、村の豪農のうちに入っていたのではないかと思われる。彼の収入のうちには、養蚕によるものがかなりみられる。

長英亡きあと2年を経た、空白13年の後に、新たに始められた日記は『農蚕日記』と名付けられ、そこには医療活動の記録はほとんどみられず（この年診療8回）、養蚕や、農業にかかわることがその内容であった。いわゆる、景作家における農業の記録ともみられる。時に1853年（嘉永6年）丑、正月からの記録である。

農業とともに行われた養蚕の記録を嘉永6年にみると、

四月十一日朝晴 風はけしく折々雨はらつく 煤をはく 大道山迄雪ふる
とあり、煤をはいて蚕を飼うための準備をしていることがわかる。大道山は、標高800メートルの大道峠を指す。

四月十五日くもる 八幡宮にてごきとふ 蚕をはき初る どゝめ日に三度つゝ与ふ
字八幡の八幡宮で、文殊院の法印に頼んで行う春の祈禱。（金井の注による）。文殊院は景作家の裏山にあり、そこへ長英をかくまったとされる。この日、1番蚕をはじめている。稚蚕に桑の葉を1日に3度も与えたということである。この後、続いて昼4度夜1度と桑の葉を与え、蚕の成長に従ってかごを増し、2番蚕、3番蚕と分けていく様子が克明に記録されている。

もともと蚕は、家畜化された昆虫といわれている。自分でエサを探すことも、外敵から身を守ることもできない。人間から整った環境と良質の桑を与えられてはじめて生育できるのであり、養蚕の技術は、人間が自然とのかかわりの中で生み出した技術の体系として重要な意味をもつものである。⁽⁴⁾

そしてそれは、生糸や蚕種増産のために、その改良とともに地域が大きく拡大されていった。『信濃養蚕沿革史料』（養蚕技術発達史、テキスト版より）には、文政、天保（1818～1843）年間に信州上田から始まった養蚕技術が武州、上州方面へ伝わったとあり、シーボルトの教育を受けた蘭方医が持っていた体温計に触発された中村善右衛門が、苦心の末制作した「蚕当計」と名付けられた寒暖計が養蚕技術改良に大きな役割を果たしたと伝えられている。すなわち夏蚕、秋蚕との飼育が温度計を頼ることにより可能になったということである。先の景作の『日記』にあるのは、春蚕のことであろう。

さらに景作は、蚕が桑を食べなくなる事を「口留まる」と書いて、休眠に入ったので給桑を中止したと述べている。この養蚕は日常的なこととなっていたが、家族や、雇い入れた男女の協力がかなりあったと思われる。養蚕によって得られた収入が最も多かったのは、1860年（安政七年）の『日記』にみられる地元の商人に15両で売った時ではないだろうか。

安政七年六月八日曇る ○市城□ニまゆを賣ル、つっかけ七貫目代拾五両也○啓助・四郎小麦を打つ○申刻頃雨はらつく○此節塩外国へ遣わすよしにて甚高値になる 洪川にて壺俵分二朱する也、此辺へ荷はひらす甚少し○油九合五勺入⁽⁵⁾

金井の注によれば、繭の代金十五両は、景作一家にとっては歴史的大金であったということである。またこの日記から察すると、塩が輸出品となって値があがったことがわかる。二人の息子が農業に従事していたことも書かれている。かれの一家は、養蚕と農業だけではなく、日常的に生活に必要なものは、自分たちでつくっていた。その一つが醤油、味噌をつくることであった。日記をもどってみると、日常的にその習慣があったことがうかがえる記録がある。

嘉永六年十月十八日晴 昼より曇る○今日しゃう油を作る日也其方 麦糶六升 豆八升 ふすま九升 塩五合 水四手桶よくかきませ四五日置 甘ミ出たる時に塩をよき程ニ入る 醤油を作る様子が書かれている。

農業については、家族3人を加えた総勢11人の大人数での田植えから、下草刈り、麦打ち、稗種蒔き、草むしり、畦ぬり、肥やしをやる、など盛んであった。この農業は景作一家を支える収入のもととしても重要なものであった。景作が老いた後でも嫁、孫3人の生活に役立つ収穫ができたことを記録している。日記には、植え付けたり収穫したりした農作物が書かれている。

明治七年には次のような記録がある。

十一月小廿日晴○今日蛭子講ヲスル○杉山平吉女を診ス 去年酉ノ耕作雑穀書上ノ記

一 大麦四石八斗	一 小麦一石五斗	一 大豆一石四斗
一 赤小豆 四斗	一 粟 一石也	一 稗 式石五斗
一 黍 式斗壹升	一 粳米式石壹斗	一 糯米九斗
一 糸 五百六十匁		此代金拾五両壹分貳朱也

えびす講に、前年明治6年の収穫を記している。収穫した作物は、大麦、小麦、あずき、あわ、ひえ、きび、もち米と普通の米、そして絹糸だった。

3. 医療活動

A) 診療の実態と世相を映す外科的治療

1839年（天保10年）12月18日に、高野長英がとらわれ永牢の身となった後、同月25日から景作の日記はない。しかしこの天保10年には145回の診療をしている。日記が再開された1853年嘉永6年には、前述の如く農蚕に力を注ぎ診療は8日しかなかった。かれが、ほぼ完全に医療活動に復帰したのは、174回の診療を記録している1855年（安政2年）であったと考えられる。が、この年もやはり『農蚕日記』と題し養蚕の記録が多い。また、正月16日の日記には、例年の味噌作りをしていることが書かれているが、それに対して一方では、同じ年に、甚兵衛の死骸が川の中にあるのを出訴し、田の畦で雷にうたれて死んだ弥次兵衛を役人とともに相改め、変死した人を引き取る、などと記された外での医療活動もみられる。

景作の日記から診療の様子をみると、1838年（天保9年）から1874年（明治7年）まで、1年の平均診療回数は、127回ほどであった。往診の範囲をみると景作が住んでいた横尾村から近いところが、そのほとんどだったようである。かれは依頼に応じてころよく往診に出かけている。1度診た患者は、2度3度見舞い、それも毎日のように診療することが多かった。重症の場合には、それ以上の往診をしている。かれは、医学に携わる者は、無私無欲の誠実さと、思いやりをもって患者を治療しなければならないと、常々その心構えを弟子たちに述べ、自身もその信条をもって患者に対していることが、日記全体を通して散見できる。

景作の医療活動についてみると、それは先のような往診、自宅での診療、そして簡単な薬の販売などであった。そのうち往診については、第三者の家に呼ばれて患者を診察することもあった。しかし、重症の患者や、遠い村に住む患者の場合、往診に行ってもその家に泊まることもあった。また時には自分の駕籠を患者の元へ送り、患者を自分の家に連れてきて泊まらせて診察をした。それらのことは日記に、

安政三年七月廿二日晴暑し○林昌院にて伊香保の婦人を診す○金舛へ勘定済○佐太郎方より駕籠を取りよせる○夜雨ふる

安政四年九月八日晴○吉衛門病氣重きニ付駕籠にて迎ニ行○長久保伊兵衛妻を診すと書かれている。医療活動に復帰した翌年に、駕籠を備えたことがわかる。駕籠は、景作家現当主高

橋忠夫氏によれば、大正時代まで景作家に保存されていたという。今の時代でいえば、一種のステータスシンボルとでもいうものであったのだろうか。

景作はあらゆる病気に対して治療を施したが、中でも外科的な症例については、具体的な事例に多く触れている。

天保十年二月廿日晴 今晚今井善左エ門自害ニ付秀益ト共ニ治療ス
自殺未遂の患者を、他の医師とともに治療している。

安政二年十一月三日晴風有て寒し○年貢勘定始まる。○銅作^{ひつひん}膝^ひを鉈にて切しを療す
膝頭をなたで切った治療である。

安政三年六月七日晴○田霍丘の日蔭田を植る○出先の一升苗を植る○周治郎・眞重郎助る○中之
条町の田屋友七切腹を療す○夜雨ふる
切腹して自害しようとした人の治療をしている。田植えに、助っ人がいたことがわかる。

萬延二年八月十一日晴 時候相應冷氣ニ成○尻高村隆助再感ニ付診治を乞来る 途中熊野にて落
馬○今朝大塚村にて壺人尻高村ニ而我共ニ四人落馬したり、其内桶ノ口加十郎左之腕脱臼、肱
骨附皮を破り突出ス(ル) 一寸許、渋川高橋英齊・吉田健隆・予立會ニて治療を施す○大塚
村傳兵衛を診ス

落馬による怪我の治療を、医師仲間とともに3人立ち会いの上で治療している。

同年十二月十二日晴○上野原病人ヲ見舞○夜健嬰丸を造る○夜五時大塚村安平女房を、同村□□
来りて戸口より、鳥渡咄したき事あれは外へ出てくれよといふに、何心なく出たるに、雪隠の
かけより頭巾をかふりたる男出来り、子細有て沼田屋敷より召捕に來たり繩をかかれというま
ま、しはらんとする故に声を立たれば、腕首にかけしなはを刀にて切り、逃出す處を後より
右の耳上を二寸餘り切られ、内へ逃げ込む内に盜賊は何處共なく逃去りたるとなり、右ニ付治
を乞来る、四時半頃大塚村へ行

泥棒に襲われ怪我をした患者の治療をしている。大塚村安平家に泥棒が入ったということは後々まで
も語り継がれたという。(金井の注による。)

文久二年三月大五日晴○傳重郎妻所謂鎌イタチニテ、右の脛^{スネ}八寸斗破裂シ夜四時頃診ス○三升入
一般にいわれる「かまいたち」とは、ちょっとした動きなどで、ぶつけたわけでもないのに突然に皮
肉が裂けて切り傷のできる現象をいう。かつては、イタチの仕業とされていたのでこの名がある。し
たがって、農作業での鎌で傷ついたのでない。

元治二年八月大四日晴○往還道普請○伊勢町へ行、夜九時平村八郎左エ門、同村元右衛門宅ニて
自分腹へ少々瘡^{きず}付候ニ付年寄文右衛門頼ニ依、恒齋同道ニて行、寅刻頃治を施す○夜雨降
腹に傷ついた患者宅へ、弟子の関恒齋を伴って治療に行く。夜中の治療となる。

慶應三年九月八日曇る○下村清兵衛柿木より落 朝五ツ時診す暮六ツ時頃死す
慶應四年九月小六日晴○夜亥刻、尻高村當役より診を乞来る者の云ふ、今日村方ニ悪徒一人來り
候ニ付、沼田同心衆六人出役いたし、村中人足罷出召補ニ向候所、出役壺人手疵を負候、右肩
先の疵^{きず}四寸斗、同手掛の疵六寸計、右の腕横疵式寸五ト、眉間式寸五六ト、右の耳後かすり創
式寸四五ト、同村平庵兩人ニて治を施す

明治維新の動乱期に起こった事件で、午後十時頃に、悪党をとらえようとした同心らが、肩、腕、眉
間、耳の後ろなどに傷を負った。もう一人の医師とともに夜中までの治療となる。

明治三年十月小三日晴○午後青山村金傳次見踏胃部於馬(馬に胃部を踏まれ)請治来、伊勢町
喜樂屋と同家に泊る

同月四日晴れ○彦平妻を見舞○金傳次危篤を告又迎來、即往胃内傷損不請水穀必死を顯ハす、夜
四ツ時死、謙蔵・竹坡・喜樂屋四人同家を退く
馬に胃を踏まれた患者は治療の甲斐なく、翌日死亡した。

景作が、事故による怪我などを好んで記録したわけではないが、おそらく発熱、腹痛などのよくある日常的なありふれた事例については、とりたててあげるほどのこともなかったということかと思われる。しかしこうした記録からは、当時の庶民の動きや世情などをかいま見ることができるのではないだろうか。

B) はしかの流行

1862年（文久2年）、432回ともっとも診療回数が多かったこの年、中之条地域にはしかとコレラが大流行した。日記には、

文久二年六月大廿六日晴昼ハ暑シ、○只乗松右エ門孫ヲ診ス、○平村茂八右エ門娘ヲ診ス、薄暮雨降、○おきせ・織弥・辨次上野へ行、○中之条町麻疹甚流行、○愚俗、人參、反鼻、キナ、サフラン等多用死ス者甚シ

と書かれ、景作はいち早く、疫病がはしかであることを断じている。しかも、この流行により死者の多く出たことを記録している。このはしかにかかったとき愚かな者は、朝鮮人參やまむし（反鼻）、アカネ科の常緑木であるキニーネ、アヤメ科多年草のサフランなどの薬を使いすぎて死に至っている者が多いとも述べている。続いて、

同年七月十八日晴○原岩本村主馬藏悴ヲ診ス○同所彦兵衛妻子ヲ診ス○同所市左エ門婆々ヲ診ス
○同所喜兵衛妻子ヲ診ス○蟻川村栄八・文兵衛店重兵衛ヲ診ス○松兵子宅ニテタ飯ヲ喫ス○同村幸助・半右エ門ヲ診ス○宗七弟ヲ診ス○此度流行ノ麻疹甚悪性ニテ一凡ニ下痢シテ陥没シ廿日三十日不差死スルモノ甚多シ 然モ多病合併カ或ハ熱性ノ薬ヲ用ル者死スノミ、緩和清涼薬ニテ療スル者百人ニ壱人二人死スルノミ

患者の治療に当たった景作は、麻疹に罹った患者は下痢で衰弱して20日から30日で命を落とすことになると述べ、合併症がその大きな原因であると書いている。また、身体を温める薬を用いた者が多く死にいたり、身体を冷やす薬を用いた患者の死は少なかったということである。

このほかにも、かれの次男四郎（21歳）がはしかにかかったが、薬を与え、「・・・甚軽キ容也」と書き、さらに、前述の蟻川栄八から往診の依頼があったが、自分の幼い孫二人が麻疹の極期にあるとして往診には行かず、3診目のその患者には薬を与えたことが記されている。しかし、遠い他村の栄八は断ったが、村の内の初診の患者は受け入れている。

いよいよ事態が悪化し、薬が払底してきたことを次のように記録している。

文久二年八月十七日晴、昨日ヨリ朝夕ハ涼シ○富藏を見舞、九左エ門娘・林治郎・茂作・太郎右エ門夫婦・タビや妻ヲ見舞フ○上市ヨリ薬品九品入○當時麻疹大流行人死スル事甚多シ、薬品甚拂底ニテ、壱斤ノ注文ニ付五匁目カ十匁目シカ遣ハサズ、末々ハ要用ノ品ハ無クナランモ斗難シ○夜大雨、夜半頃伊勢町ヨリ帰ル

往診も多くなり、薬も払底してきた中でかれは、まず我が村の患者を大事に考え、いつでも対応できるように、遠いところへの往診は、門弟の関恒齋にゆだねていた。犠牲者も増え、こうした最悪の事態を迎えた麻疹の流行は、ついに宗教的な対策を講じることにまでなった。この年、7月末から8月の初めに、はしかの神様を追い払う祈祷が行われた。

文久二年七月二十九日晴○青山村金左エ門・岩吉・金兵衛・道之助・徳左エ門下女・喜兵衛ヲ診ス○伊勢町柳田小児ヲ診ス、丸山娘ヲ診ス、勘左エ門家内四人ヲ診ス、十一屋藏頭ヲ見舞、中之条町麻疹ニテ死スル者甚多キニヨリ、近辺村々太々神楽護廣（護摩であろう）等ヲ執行シ或ハ獅子舞其外祈祷等日々ニアリ

同年八月大朔晴、此頃暑中の如し○重兵衛妻ヲ見舞、幸助ヲ見舞、惣七悴ヲ診ス、同家ニテ酒ヲタバ飯ヲ喰ふ○麻疹悪症多キニ付神送りヲスル

『日本の医療史』に次のようなことが書かれている。「江戸時代に出た錦絵に「はしか絵」と呼ばれ

るものがある。そのほとんどが文久2年（1862）のはしかの大流行時に板行されたものである。その数はおそらく100種以上あるといわれる。しかもそのほとんどがこの年の6月と7月に出たことを示す改印がある。なぜ、この時これほど多種類の「はしか絵」が出たのであろうか。その謎解きは難しい。だが「はしか絵」からは、庶民がはしかを怖れながらも、一度これにかかれば、終生麻疹から免れることを知っていて、どうすれば軽くすませられるかに腐心した様子がかがえる。

「はしか絵」には、一枚一枚違う種々雑多な記事が載る。しかし、ほとんどが予防か、かかっても軽くすませるための心得や、呪と、回復期の養生の三つに大別できる。

食養生については、人によって善悪が違ったらしく、「はしか絵」に書いてある内容も、絵によって違っている。しかし、一般になま物や油物、刺激物は避けている。

生活上の注意は清潔に保ち、道徳的に正しい生活を送ることといい、そういう家の者は麻疹にかかりにくいと説く。これは病気が不道德の罰として顕れるという考え方がまだ存在したことを示している。」⁽⁶⁾

このような疫病の流行に直面し、さらに多くの犠牲者が出るという現実をみたとき、人々は、医療に頼るだけでは安心できず、その不安を神仏や呪い^{まじな}に向けたのであろう。犠牲者には特に幼い子どもが多かったという。

この年、景作の診療回数が最も多かったのは、はしかの流行と共に、合わせてコレラが流行したことにもよる。はしか⁽⁷⁾で体力が落ちているところへ忍び寄って、いっそう事態を最悪のものにしたと考えられる。

C) コレラの流行

日本に初めてコレラが入ってきたのは、1822年（文政5年）であった。この年、はじめ対馬で大流行し、それが下関、萩へと広がり、山陽道を東へ進み、広島⁽⁸⁾の城下町、大阪、京都、伊勢へと街道に沿って広がり、さらに東海道を進むコレラは、このたびは沼津あたりでとどまり、箱根を超えることなくおさまった。

『日本医学史綱要2』ではこのことについて、「その症、暴劇にして、医俗ともに未だかつて見ざりしところの一病なりしが故に、対馬にてはこれを見急（けんきゅう）と名づけ、芸州にては「横病」または「ころり」といい、豊後にては一にこれを「鉄砲」と称し、浪華にては「三日ころり」と名づけたり。（中略）蘭方医学の書には、文政五年以前のものに、この病を挙げたるものあらず。」⁽⁸⁾と書いている。

続いての流行は、1858年（安政5年）の5月（太陽暦7月）、初めての流行から36年経っていた。長崎港に入ったアメリカ軍艦ミシシッピー号の船員にその患者がいたことから始まった。このときは、前回汚染されなかった箱根以東にも広がった。しかし完全な治療法、薬はなく、江戸府下のみで三万余人が死んだという。庶民は、コレラ退散を祈るさまざまなかかわら版や、村の境で鉄砲を撃つなどのコレラ退散祭りなどを行った。

安政五年八月十五日曇る○四万村より点取懐紙来る即評○江戸にて卒ニ吐下を發し忽ち死せる者甚し、是玉川へ毒を流せし者有とも又アメリカ人婦帆に付海にも多く洗濯をせしか、若毒物にても遣しやなど、さまざまの説あれとも是全く時候のさハリなるへし○薄暮より雨ふる数日間で死に至るコレラの恐ろしさに、その原因についての多くの風説が流れた。誰かが玉川に毒を流したのだとか、帰国するアメリカ人が海に毒でも流したのではないかというような噂が広まった。しかし、景作は、それらはすべて、原因のわからないコレラの恐ろしさからくる庶民の風評であり、この時代の好ましくない兆候であって、実は、この病は「時候のさわり」なのだ判断している。この日の記録から景作が、俳句の評もしていることがわかる。また江戸のコレラ流行について、

同年八月廿三日晴○高崎様江戸屋敷にて急病にて死する者七十三人也と云 筋違見附を通り候葬

送一日百三十有し日ありといふ説あり

と、その風説について記録している。

1862年（文久2年）夏、はしか流行のあと、第3次のコレラ流行の波が押し寄せた。はしかとともに、おびただしい数の人が亡くなった年でもある。景作の日記では、

文久二年八月晦雨○伊勢町林藏ヲ診ス○東兵衛ヲ見舞フ 竹ノ中聳ヲ診ス○中之条五右衛門妻ヲ診ス○越後豊吉娘ヲ診ス○夜五ツ時半頃帰宅○江戸其外中仙道筋・前橋・桐生大急病流行、人多ク死スルヨシ、此病ヲ金時コロリ俗ニ唱フ、按ニ是必猩紅熱ナルヘシ

とあり、景作をはじめ、猩紅熱ではないかと考えていたようである。当時景作の村をはじめ、近隣地域の多くの人々を苦しめていた、疫病と結びつけてはいなかったことがうかがえる。はしかに続いてのコレラというように、ほぼ同時期に万延した死亡率の高い病気をみて、景作の記録がいささかの混乱を招いたかもしれないということは、容易に考えられることである。

この後、時を経てコロリのことについては、明治7年の日記に興味深いことが記されている。

明治七年七月六日晴○日蔭田ヲ植ル○深夜雨、大塚村田村歌平男ヲ診ス○此頃急症腹満微痛、下利（痢）或嘔吐スル大人小兒大抵之レニ係ル、小兒ノ之ヲ患ル急ナルハ一昼夜ナラズシテ死ス、是ヲ俗間コロリ病ト唱フ、赤紙ニ牛馬ノ二字ヲ書戸口ニ貼スレバ此病入ラズト云フ、如何ナルタフレノ云ヒ出セシニヤ

と書かれ、コレラ病の恐ろしさとともに、そこから身を守るために考えた、庶民の無知と迷信を「何たる愚かなことか」と手厳しく批判している。そこには一蘭方医であり、時代の先覚者としての景作が、農村社会の因習や迷信から抜け出した姿を見ることができるのである。

D) 痘瘡

江戸時代の疫病の一つに痘瘡がある。

酒井シヅは、「日本の流行で最古の記録は735年（天平7年、奈良朝時代）である。人類が痘瘡を克服するまでには長い歴史があった。特に、江戸後期に種痘が行われるまで、ほとんどの者がそれから逃れる手だてもなく、可愛い盛りのこどもをみすみす失った。また、命は助かっても「ほうそうは器量定め」といわれたように、生まれもつかぬあばたになることが多かった。安政4年（1857）に来日したオランダ人医師ボンペは、日本人の三分の一はあばた面であるといって驚いている。当時のヨーロッパは、ジェンナーの種痘法が行われてから、すでに60年近くたっており、来日したとき28歳のボンペの世代は、痘瘡の本当の怖ろしさをもう知らなかったに違いない。

痘瘡が疫病であることは、それが日本に現れた当初からわかっていた。はじめ原因を天候時気の変化と考え、それを鎮めるため神仏に祈ったが、中国の元のころより痘瘡の原因に胎毒という内因を考えるようになった。」⁽⁹⁾と記している。

痘瘡の歴史や原因、治療法などについてはここで言及することはせず、景作の『日記』から当時の様子を見ていくことにする。

蘭方医が、ジェンナーの天然痘予防のためのワクチンと、予防接種を日本に取り入れるために尽くした業績はしばしば聞くところではあった。群馬県史には、上州における牛痘接種について蘭方開業医の業績をあげている。

「1857年（安政4年）種痘を施すから進んで接種を受けるようにとの触れが出されていた。その触書によると、種痘接種の費用は身分相応の謝礼でよいから、貧困の者も手軽に接種を受けるように、また種痘の安全性は医書にも明記されていることだから、心配しないようにと記してある。（前橋市立図書館所蔵文書）。（中略）まず熱心な町医者が種痘を始め、やがて藩の医師が是に加わっていたことがわかる。

次に早い時期に行われたものとしては、中之条地方の蘭方開業医で、高野長英門下の高橋景作が、

萬延元年に、近村一帯に種痘を実施したのが、記録的に確かめられるものである。(中之条 高橋忠夫家文書)』⁽¹⁰⁾と書かれている。

それを裏付ける記録として、1860年(安政7年)の『日記』には、

安政七年閏三月四日霜降甚寒し○嵩月来牛痘種を持来る、孫に種痘を施す
とあり、俳句の友人嵩月を通して種痘のワクチンを手に入れ、孫娘のリヤに接種している。このときのワクチンの入手ルートについては定かではないが、嵩月の、やはり俳士である叔父が、江戸にいたということで、そのルートからではないかと想像されている。孫娘リヤはこのとき、2歳か3歳ではなかったかと思われる。

同年閏三月十六日雨昨朝より止まず○種痘祝ひをする 鳴田川洪水橋を引
ワクチン接種が成功したことを祝ったという記録である。この日、大雨による洪水で、橋の流れるのを防ぐために橋を外したと書いている。この数日後(3月21日)、10歳になる外孫にワクチンの接種をしている。かれは、自分の孫に接種したワクチンの成功を見た上で、おそらく広く地域の人々に接種しようと慎重に考えていたに違いない。かれが依頼に応じて吾妻郡各地へ種痘を行っていったこと、こうした面での蘭方医の功績が大きかったということが、先の『群馬県史』には書かれている。しかし、文久4年4月27日の『日記』には、前年生まれた内孫に種痘を施したが、無効だったと記している。ワクチンの効力に問題があったとも考えられる。

明治四年三月小六日曇○十二ヶ岳榛名山其外山々ニ雪降、岩鼻縣より被仰付中之条野口種痘を施す

この記録では、金井の注によると、「この年岩鼻縣の仰せにて、十歳以下の子どもを中之条まで連れ出し、植痘瘡ある」としている。中之条医師野口の接種によるものである。岩鼻縣庁は、現高崎市におかれ、のち他の藩と合併して群馬県となったとの記録がある。(群馬県の歴史・県史シリーズ10)地域的に見ると、高崎方面から吾妻中之条まで子どもを連れてきて、種痘を施したということか。

E) 出産・神に祈る

当時、通常の出産に際しては、所謂「産婆」といわれる者が付き添うのが普通であった。しかし、景作はこの出産にもかかわっていたようである。

安政七年正月十一日曇朝晴○未明竹井團蔵妻安左衛門宅にて險産診を乞ひ来る、早朝平産

文久二年二月小十日晴○箱嶋村田夫、長窪おのお婆々ノ所持ノ丸薬ノ鑑定ヲ乞来ル○渦間三郎右エ門妻難産ヲ救治ス

上の2件は、往診を求められて、難産を救った記録である。次の2件は、胎児を包んでいた薄い膜と胎盤、いわゆる後産を取り除く手術である。

安政二年正月五日晴寒シ○宇都間おいせ安産 包衣不下手術を投す

明治三年六月四日微雨○早朝長石平吉妻を診す、胞衣不下施術

かれはまた、明治4年10月29日の記録では、後産を促し処理する薬を処方し与えているが、お産にはつきあっていない。文久3年10月の日記では、近しい者のお産に直面した人間としての景作、そして歌人としての景作をかいま見ることになる。

文久三年十月大廿日雪ちら々吹来る○笹屋隠居へ招る、栃瀬おかと陰産○おきせ臨月今夜俄に水
下り一切陣疼なし

十月廿一日晴○おかと横産ニ付林謙隆を呼よせ回生術を施さしむ

十月廿二日晴○同人胞衣下らす、午後鉤胞術を行う

十月廿五日晴○おきせ今に至り水下り不止産期に至る状なし、甚難産を恐れて安産を祈る和歌三首咏ず、其内一首は天一天上を除る歌なり、是を張置て鎮守へ参詣せしに、いまた帰らざるニ極安産にして母子ともに平安なり○深夜俄に雨降

この数日の記録からは、当時のお産に医師がかかわったことがわかる。陰産（横産）のおかたとを他の医師とともに正常に戻す術を施したとあるが、具体的にどのようにしたのかは明らかではない。ただ自分一人の力ではころもとなく協力者を得たということは、その術がまだ一般に浸透していなかったからとも言える。産科については、医学の発展にともない、外科に次いで眼科、口科（歯科）とともに古い時代から専門化していたと『日本の医療史』（P. 335）にある。

『日本の医学』によると、賀川玄悦（1701～1777）の賀川流産科はよく知られているが、賀川が67歳の時公刊した唯一の書『産論』は、古い因習にとらわれ空理空論が横行している時代にあつて、近代的な西洋医学を取り入れた優れた書であったという。

「彼が創案したおもな手段は五種あり、中でも回生術（横産整復術）と切碎術（胎児挫碎娩出術）は最も苦心したところであり、鉗子分娩も行い、産前産後の処置についても改革を加え、これを秘することなく本書中に記している。」⁽¹¹⁾とある。

横産を治したものの、後産がおりず、景作は鉤を使って手術したと書いているが、賀川流産科によるのであろうか。しかし、詳細は不明である。さらに嫁おきせの出産には、心安らかではなかったようである。臨月のおきせが破水して陣痛のないまま、5日間を過ごしたとき、景作は、安産を祈る和歌を3首詠んで、それを地元の神社に奉納した。帰宅したかれが見たものは、母子の無事な姿であった。医師であっても神に祈らずにはいられない景作がそこにあった。こうした「祈る」という人間本来の心の形があるとはいうものの、前述賀川流産科に見られる如く、このときすでに、農村部においてさえも出産がいわゆる、不浄なもの、儀式的なことではなく、確実な一つの医療活動として、定着し始めていたことに気がつかなければならない。

4. 海外での『高橋景作日記』の研究

Ellen Gardner Nakamura の “Practical Pursuits” Takano Choei, Takahashi Keisaku, and Western Medicine in Nineteenth-Century Japan. Harvard East Monographs 255 (Harvard University Asia Center 2005) という本がある。これまで高橋景作については、郷土史研究家の視点から多くの研究論文が発表されているが、海外でのそれはほとんど目にすることはなかった。『Practical Pursuits』と題するこの論文は、日本の医学史をふまえた上で、江戸末期における日本がどのように西洋医学を受容したか、また、当時の地方医師や庶民の生活、診療のあり方などについて、特に高野長英及びその門弟の一人高橋景作という二人の蘭学者に焦点を当てて論じられたものである。その拠り所となったのが『高橋景作日記』であった。

著者ガードナーは、景作を高い教養のある農村のエリートの人として、その生活を豪農層の典型的な一例としてあげている。景作の36年余にわたる日記が、かれの子孫である高橋忠夫氏、地元の郷土史研究家金井幸佐久氏の尽力により出版されたことを評価し、それが、景作の日々の活動、往診、訪問者、そして田畑の仕事についての正確な記録であることを述べている。さらに景作の日記には、当時の経済市場及び時事問題に対する詳細な観察が含まれていることにも触れ、と同時に、ほとんど知られていない江戸時代の地方医師の日常生活を描いた、学問的にも意味のある資料であると述べている。本文の中からその一部を紹介しよう。日本人から見たものとは違う視点がそこにはあるかもしれない。

第4章の、「“The Way of Medicine” Takahashi Keisakus Daily Work」と題された中に「Networks and Book-Lending」（ガードナー原著 P. 153）というタイトルがある。ガードナーは、ネットワークということばをしばしば使っている。西洋医学を受容する過程で、また、師と弟子との関係においても、自己の医療活動においても、ネットワークがどれほど重要な意味をもつかを語っている。それが当時にあつては重要な意味があつたということは、今の時代においては、あまり考えられないのが

実状である。

以下、ガードナーの論文の一部を翻訳して示すことにする。(出典、注、年号など、すべて原文のままである)。

A) 牛痘のワクチンを生かしておきながら運ぶには、地域の医師たちの協力が不可欠であった。景作の女流俳人の友人の例のように、医療分野以外の人々さえも協力を申し出た。これらのネットワークは、ワクチンの発見よりもずっと以前にできあがっていた。たとえば、中之条とその周辺に住む地元の医師たちは、定期的に助け合っていたようである。彼らは難しい治療を手伝うために同僚を訪ねたり、また二人以上の医師に診てもらっただけの余裕がある患者の家で会ったりすることがよくあった。時には、お互いに道具を貸しあったりもした。1850年⁽¹²⁾に景作は、ある患者を往診してほしいという別の医師からの手紙を受け取った。景作自身は行かれなかったため、彼は、別の医師にカテーテルを貸した。(日記6月13日) さらに医師たちが協力していた方法を示す証拠が、渋川の高橋けんじ⁽¹³⁾から中之条の望月俊斎への手紙に見られる。その中で、けんじは俊斎が不在の時に薬を投与したことを詫び、治療について俊斎の意見を求めている。(金井『高野長英門下中之条町望月俊斎の秘蔵文書を拝見して』群馬文化 1996 P. 24) (ガードナー原著 P. 153)

B) 医師たちが絆を強めた方法の一つは、本の交換であった。公共図書館がなかったため、江戸時代には私的な本の交換が日常的に行われていた。(Kornicki, Peter. The Book in Japan, Leiden : Brill, 1998P. 405) 出版が始まってからもなお、本の内容すべてを手で書き写すことが特に珍しい書物の場合はあたりまえのように行われていた。(同上 P. 243) 景作の日記には彼と弟子が借りた本、特に西洋の学問に関する本を書き写したという数多くの記録がある。

景作は1826年から37年間と、再度1845年から48年の間に貸し出し帳を付け続け、その中に貸し借りをした本の題名を、貸した相手の名前とともに記録した。(金井『高橋景作日記』P. 525～32) 後に彼は別のノートに記録することをやめ、日記の中に、いつ本の貸し借りをしたかを記録した。予想されることだが、医学書を貸した相手として、確認できるもののほとんどが医師たちであった。(注目すべき例外は、一人の修行僧である)。興味深いことに、これらの名前は、和歌や俳諧集から孔子の研究や漢詩、そして軍記物や旅行記、マナーや習慣に関する本に至るまで、他のあらゆる種類の本の題名に対して記されている人々の名前とほとんど同じなのである。貸し出し帳では、1845年以降、医学書の貸し出し数が目立って落ち込んでいる。これはおそらく景作が医師として働いていなかった期間を反映しているのであろう。(ガードナー原著 P. 154)

C) 景作が自分の身の回りで見られる変化を必ずしも喜んでいなかったことは明らかである。地元の金持ちの家をねらった略奪や放火が相次ぐ中、彼は次のようにこぼしている。「この世の無法ぶりはほんとうに恐ろしい」(『日記』1868年3月28日)。ここでも彼は、新政府の政策にきわめて批判的であった。(中略)

西洋医学に関心があったにもかかわらず、景作は日本文化の西洋化には警戒心を抱いていたようである。1867年、彼は次のように書いている。

「將軍の命に従い、さまざまな軍隊が次第に外国式の服を着、髪の毛とひげを長く伸ばし、手首にフリルをつけるようになってきた。洋服は外国の材料を使い、外国で縫製され、人々は城にあがるときに靴を履き、目上の者の前でも椅子に座る。日本の慣習はますます消えつつあり、西洋のそれに同化していく様を見るにつけ、頭が痛く、ほんとうにひどく恥ずかしい。(『日記』1867年2月30日)(ガードナー原著 P. 165～166)

D) 上野の農村部に住む高橋景作の生活から多くのことが読み取れるように、豪農たちは、ちょうど養蚕やその他の技術を試したように、医学の実験をするには理想的な立場にあった。隔離された存在として生きることとはほど遠く、19世紀の日本の農村部に住む農村部エリートたちは、数多くのさまざまな「シナプス」によって結ばれていた。農村部に住む豪農の社会的ネットワークには、医学、文学、商業、そして官界などが重なり合い、ダイナミックに混じり合っていた。これらのネットワークが、蘭学に関するものも含む情報の、日本の農村部への流れを促進し、実践の追求、社会福祉そして社会変革への関心をはぐくんでいった。(ガードナー原著 P. 174)

以上、ガードナーの論文の一部を翻訳紹介したが、ガードナーは、226ページにわたる論文の中で、『高橋景作日記』について、緻密な分析をしている。同時に日本の医療の歴史や、江戸末期の実情をよく調べ研究していることに感服する。さらに、日本の僻地上野に、いわば埋もれた蘭方医として激動の幕末期を生きた高橋景作が、アメリカ人ガードナーの目を通して、ここによみがえったことは刮目に値することである。

5. 景作の顕彰碑と拓本のこと

長英逮捕からの10余年、日記を残すことがなかった景作は、医学への意欲を失い自らの人生に大きな変革があったのではないかと考えられる。長英自刃後、嘉永6年から新たな日記が始まったが、その後も長英について語ることはなかった。長英の失脚は、景作にとっていかに無念であったことであろう。国家的にみてもどれほどの損失であったことか、後世になってなお悔やまれることである。

景作の業績、人となりについては、没後26年を経た1901年(明治34年)、門人たちによって地元吾妻神社の境内に建てられた、顕彰碑である「篁庵先生碑銘」にみることができる。高野長英の名誉が公に回復されたのは、長英没後48年を経た、1898年(明治31年)正四位が授与されたときのことであるゆえ、景作の碑が建てられたのは、おそらく長英のそれを受けてのことと思われる。建碑についての記録は、群馬県立文書館にその資料が残されている。「松本綾子家文書 高橋景作碑文の件」と題され、松本宏洞氏(1868~1929。儒学を究め詩書画に秀でる。)に宛てた、関恒斎など門人の手紙、景作の経歴などであるが、それを元にして松本宏洞氏により碑文が書かれたとみられる。たとえばこの文書には、

人物

古人 西醫

身分 本村平民高橋景作

履歴 小傳

横尾村旧民高橋四郎右エ門長男寛政11年未ノ歳出生小時學問ニ志経學及方書ヲ信濃伊藤翁學ヒ長而文政天保ノ間瑞臯高野長英門ニ入り東都麹町甲斐坂大觀堂の塾ニ在テ門人羽倉内田豪□學友ニ冠シ類ニ横文ヲ研究ス爾來塾長(後略)・・・(注 □印文字不明)

とあり、景作の経歴とともに、かれが漢文、詩、和歌、俳句を究めたことなどが書かれており、松本氏と景作門人との間に何度か手紙のやりとりがあったと思われる。この文書を読んでいるうちに、どうしても我が目で碑文を確かめたいと思うようになり、群馬大学教育学部の石田肇教授と大学院生三人の協力を得て、さる日、その拓本をとることができた。碑高261センチメートル、台石の高さ125センチメートルという大きな石碑は、石で積まれた足場も悪く、しかも強風にあおられ採拓には大変難儀をした。拓本を手元に置いてじっくり読んでみると、従来紹介されている碑文と異なる文字もあり、また、聞くところによると景作の碑の拓本が採られたのは、今回が初めての様子で、伝えられている碑文との間に問題点もみられ、これらのことについては、今後少しずつでも実際の碑文に即し、研究

を進めていきたいと考えている。

6. おわりに

人は自分の日常的な記録を日記という形で残しておくことがある。それが、大きく社会情勢や世相を語り、また犯罪などの解決の糸口になる場合もある。幕末、明治期に書かれた日記は様々あるが、例えば、『渋沢栄一滞仏日記』『木戸孝允日記』『大久保利通日記』などのように、当時の日本国内外の状況を知る上で、歴史的に大きな意味をもつものも実際にある。こうして公にされた『日記』は数々あるが、今後は、『高橋景作日記』のように、埋もれていたものにも注目したいと考える。地方の一蘭方医の記録であるこの書が、公に世に出たことは日本の医学史の上から見ても意義深いことである。この書をどう活用するかは様々考えられるが、今後、さらに自分なりの分析を進めていきたいと思う。

『日記』を読み込んでいくうちに、これをまとめ上げた金井幸佐久氏の努力には感動すると共に、ただただ頭が下がるばかりである。また一アメリカ人のガードナーが注目したことも大きな意味があり、今後の展開に希望を見いだすことができる。

小稿では、『高橋景作日記』から、ほんのわずかな一部分だけを取り上げてみたが、景作が翻訳にかかわった、『グーテンハーク外科書』、オランダ文法書の『ゴルテル凡例原書』など医学書のこと、和歌、俳句、儒学における交友関係、薬のこと、学校や教育のことなど、広い範囲についても追求を続けていきたい。

【注】

- (1) 高橋景作は1799年（寛政11年）群馬県吾妻郡中之条横尾村に生まれ、1874年（明治8年）77歳で没するまで、その青年期を江戸文化爛熟期に過ごし、高野長英という俊才な師に出会ったことにより、蘭方医学への道を歩むことになった。長英の塾、大観堂の塾頭にもなった景作は、オランダ語を訳すこともできるすぐれた蘭方医でありながら、儒学、国学、詩歌にも長けていた。寺子屋を開いて、地域の子どもの教育にも情熱を傾けた。
- (2) 『高橋景作日記』は、1995年（平成7年）景作没後120年を期に、地元郷土史家、金井幸佐久氏を中心に、景作玄孫の高橋忠夫氏をはじめ、高橋景作日記刊行会委員の協力により出版された。612ページに及ぶこの書は、第1部『高橋景作日記』の翻刻、第2部「分析研究」とからなり、蘭方医学の書籍など学問的にも重要な資料と共に、景作が生きた幕末の激動の時代が、克明に描かれている。元になる景作の日記は、1838年（天保9年）から、1874年（明治7年）までの日常の記録である。和紙にきれいな筆跡で書かれた20冊にのぼるこの日記は、現在、高橋家に大事に保存されている。
- (3) 石原 明『日本の医学』その流れと発展 至文堂 1966年 P.162
- (4) 佐藤和彦 他編『資料でたどる日本史事典』東京堂出版 1988 P.186
- (5) 1860年は萬延元年（安政7年閏3月、萬延に改元）であるが、景作の日記は、安政七年とし、萬延元年はない。ただし日記には、「閏三月朔萬延年号改御觸出る」と記されている。
この日の記録、まゆを売ったときの「つかかけ」とは、金井によれば、「風袋ぐるみ」のことをいう。
- (6) 酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍 1982年 P.376～379
- (7) 『日記』の中では、はしかと、麻疹は同じ意味のこととして時に入り混じって書かれている。酒井は、「麻疹をはしかと呼ぶのは、この病気にかかると麦の穂に触れるときの感触に似ているからだという。そのためか、麦の穂を門につるしておけば、麻疹にかからないという迷信もあった。」と書いている。（前掲、酒井書 P.379）
- (8) 富士川游 小川鼎三 校注『日本医学史綱要2』平凡社 1976年 P.155
- (9) 前掲『日本の医療史』P.364～365
- (10) 『群馬県史』通史編6 1992年 P.381～382
- (11) 前掲『日本の医学』P.163
- (12) ガードナーの論文153ページに、1850年の景作の日記として記してあるが、この年は嘉永3年（『日記』の年譜による）であり、1853年、嘉永6年から日記が再開されているのだから、1850年の日記はない。何かの思い違いか。
- (13) 同じ153ページにある高橋けんじは、高橋英齋ではないか。渋川の高橋といえは、重病人の立ち会い診療で

『高橋景作日記』にみられる幕末の医療活動

親交のあった、高橋英斎と医師の高橋蘭斎の記録はあるが、交友記録の中にけんじの名は見あたらない。

[参考文献]

- 丸山清康『群馬の医史』群馬県医師会 1958年
屋代周二『高野長英と群馬』あさを社 1977年
金井幸佐久『吾妻の蘭学者たち』上毛新聞社 2001年
富士川游 小川鼎三校注『日本医学史綱要1』平凡社 1974年
新村拓編『日本医療史』吉川弘文館 2006年
青木歳幸『在村蘭学の研究』思文閣出版 1998年
添川正夫『日本痘病史序説』近代出版 1987年
岡村千曳『紅毛文化史話』創元社 1953年
佐野正巳『国学と蘭学』雄山閣 1973年

付 記

幕末における蘭方医にかかわる教育、特に家庭でのそれがどのようなものであったのかを調べてみたいという思いからはじめたこの研究は、図らずも埋もれた一蘭方医の日記から、その業績と医療活動に目を向けることになった。同時に今まで見えなかった、当時の世の中の動静が現れることにもなった。この後も、様々な角度から、吾妻の蘭学と医療について、高橋景作を中心に、その真実を追究していきたいと考える。幸いなことに、高橋家現当主高橋忠夫氏と、地元歴史民俗資料館館長唐澤定市氏をはじめ、学芸員福田義治氏の協力を得てここまでこられたことを感謝し、さらに今後のご教示を願うものである。

特に小稿では、群馬大学教育学部石田肇教授に、大学院生共々「皇庵先生碑銘」の採拓にご尽力いただいたことは、今後に向けての大きな進展といえる。また、景作の師の一人伊藤忠岱ゆかりの地出身の医師清水哲夫氏から、医学の資料や書籍の提供を受けたことは、研究の大きな力となった。諸氏に感謝。

なお、小稿の中での『日記』の仮名遣い、漢字などの表記はすべて原文のままとした。

(受理日：2008年2月27日)

